

Lewin, Kurt. 1949. "Action Research and Minority Problems." *Journal of Social Issues* 2(4): 34-46.

Nakamura, Yusuke y Yoshiaki Hisamatsu. 2005. "Documentos para tejedoras: Prácticas del manejo del documento en un taller de artesanía para las mujeres bilingües (Sucre, Bolivia)." En Clara López Beltrán y Akira Saito (eds.) *Usos del documento y cambios sociales en la historia de Bolivia*, pp. 97-148. Osaka: National Museum of Ethnology. <<http://hdl.handle.net/2261/4009>>

## テキスト空間論の構想

——日本近代における出版を素材に

佐藤健二

### 1 「読書空間」と「テキスト空間」

この章で論じようとする「テキスト空間」は、情報を記録し意味を表象する「物体」としてのテキストと、それを生みだし読み解し考え集め伝える「主体」としての人間とで構成される。すなわち「テキスト」と「人間」との、集合的で重なり合う動きが浮かびあがらせる場であり、テキストの生態系とも考えることができる。

テキストは、文字や印刷などメディア技術の力を利用して、紙葉や冊子ばかりか碑文や画面表示などの形態をとって、「物的あるいは「事的」対象として人びとの生活に生みだされる。社会に生みだされたテキストは、公的、私的、制度的、情動的……、また音読、黙読、立ち読み、斜め読み、「積ん読」……、さまざまな読み方で人びとに受容されていく。集められて寺院や図書館や書齋のような場所に留まり、時に埋もれて倉の奥底や袋綴しや屏風や襖の裏貼りの背後に忘れられ、また不要なものとして棄てられ解体され余剰として断裁されて消滅していく。テキスト空間は、そうしたモノ（物）でありコト（事・言）であるテキストの社会的生態の総体である。

テキスト空間において解読し探求すべきは、伝達された意味内容だけではない。なるほど記号としてのテキストの解読は、人間社会のコミュニケーションを把握するうえで、たしかに重要である。しかし伝えられた情報だけがテキストの存在理由ではない。メディア論者のマクルーhanは、個々のメッセージの意味内容ではなく、メディアの身体

的受容それ自体が根源的なメッセージとして力をもってしまふと論じた(マクルーハン 一九六七)。悪意を疑いたくなる誣説であれ、不安にまみれた邪推であれ、うまく伝わらなかつた意味から意図せざる結果の思いがけない拡がりまで、事物としてのテキストは、それぞれの社会において複数の局面を有している。

### 読書空間と資料空間

この主題との私自身の関わりは、「読書空間」の近代を論じた二〇年前の著作にさかのぼる。「読書空間」という耳慣れないことばを中心にすえ、民俗学者としてはかり論じられてきた、柳田国男の学問の方法の新しい特質をそこで説こうとした(佐藤 一九八七)。

批判の焦点の一つは、フィールドワークの神話化であった。今なお、フィールド調査の実践と印刷本の読解作業とを対立させ、民俗学と歴史学の方法を対立させようとする言説がある。それは明らかに粗雑なものであるが、しかし常識の直観に深く根づいているがゆえに、しばしば無自覚にくり返される。しかしこの民俗学と歴史学の二項対立は、解く必要のない問い、すなわち疑似問題である。なぜか。対立の表象それ自体が、まちがった初期設定のうえに成り立っているからである。

むしろ、柳田が構想した民俗学は、テキストの読み方の革新をこそ導こうとした。活字印刷テキストが支配的になつた複製技術時代において、その集積の密度、黙読の速度、索引の検索力等々を活用しうる読書空間の近代が、「方法としての読書」ともいべき実践を洗練させた。そこに柳田国男の可能性の中心がある。すなわち、印刷された書物の普及と蓄積とが与えてくれた参照一覽や比較の力を、民俗や郷土の身体化され風景化された「テキスト」へと応用し拡大したところにおいて、新しい観察を組織する学問の主張が成立した。固有の特質をもつテキストの「収集」と「解説」の作業として、運動としての民俗学が呼びかけられたのである。だからこそ、書物を読むこと(読書)と旅すること(旅行)とを、書齋・図書館と現地探訪・調査とに分断してしまうのは、粗雑な早とちりである。後にまとめた『歴史社会学の作法』では、「資料空間」ということばに登場してもらつた。主体に焦点をあてた「読書空間」

の設定を、もつとテキストの社会的な存在形態のほうへと力点を移して論じたかったからである。その輪郭について、次のように記述したことがある。

われわれが「社会」と呼んでいる空間それ自体がテキストである。社会それ自体が、記録媒体の集積であつて、さまざまなきごとが刻みこまれている。土地に、道に、住居に、墓所に、風景に、災害に、事件現場に、ありとあらゆるところに、人間の実践の痕跡が記録されている。身体もまた、重要な記憶媒体である。そしていうまでもなく、ドキュメント(文書)も、書物も、写真も、新聞も、統計も、社会という記録媒体の組織的な一部分である。その意味では、「資料空間」の外延はわれわれが生きている社会の縁と重なるだらう。問題は、そこに刻まれたテキストもまた、あるいはかすれ、重ね書きされていて読みにくく、古文書を読む経験を蓄積し共有してきた歴史学と同じような、資料学へと向かう想像力と考証力とが必要になる点である。(佐藤 二〇〇一a:三〇六―三〇七)

モノ(物)でありコト(事・言)である資料の動きが、歴史性をもつ「構造」として、すなわち社会という「地」に描かれた「図」として、そのテキストの存在形態を浮かびあがらせる。もちろんこの「資料空間」を構成しているテキストは、テキスト学の共同研究が核に据えようとする「テキスト」のイメージに較べて、すこし対象の外延が広いかもしれない。テキストの物質性を支える、いわゆる「支持体」の特質を限定する条件が明確には語られていないからである。しかしながら強調しておきたいのは、いわゆる定義作業につきまとう意味の区分線の微妙な違いではない。むしろ読書空間にせよ、資料空間やテキスト空間にせよ、「空間」という言葉をとにも用いている点である。

あらためて深めてみるべきは、空間ということばの共有において、いかなるまなざしが生みだされているのか、であらう。空間ということばをもち出す方法的な意義として、私は以下のような論点を設定できると思う。

## 空間としてとらえることの意義

第二は、存在論的な複数性である。空間の本質は、複数の存在を同時に内に含むことによって開かれる場という性格にある。複数の要素を同時に存在させ、配置することによって、はじめてその遠近や互いの位置関係や動きなどが意味を有する場、すなわち空間が生まれる。つまり「位置」が、それだけで意味を担うような場を、われわれは固有の意味において空間と呼ぶ。なるほど二本の座標軸を直交させれば、位置に「代数学」的に明示的な意味を与えることができる。そうしたやりかたは整理され洗練された空間の表現形式であるが、座標軸で構造化しえた場だけを空間とするのは限定しすぎであろう。もつと「博物学」的な展開がありうる。むしろ複数のカテゴリーを結ぶ線として、座標軸それ自体が成立している。その原点にもとつて空間をイメージするならば、複数性の包含という論点は、多種多様な空間の本質を支えるメカニズムである。

第三に空間は、たとえば中心と周縁、支配と従属など意味づけの不均等を抱えこんでいる。「地」となる領域を共用し占有しつづけるなかで、「中心」や「内側」という特異点が生成していく。別な言い方をすると、一定の完結性を志向する「内部」は、内属する主体の知識や経験がそこに蓄積され、空間が馴化されることを通じて形成される。地図や領土やテリトリーなど、身体の外側にある空間の分割においてだけではない。言語現象のなかにも、外部から内側を区切る境界が存在する。それぞれの母語も、仲間たちだけの隠語も、その空間は内側を確認する境界設定と内部への求心力をともなうて成り立つ。

テキスト空間の把握や分析において、複製技術がとりわけ重要な意味をもつのも、この内部の再生産および中心の析出、さらには外部の確定というメカニズムに深く関わりあっているからである。書かれたものを大量に複製する技術である印刷は、このような閉域の共有を想像の共同体として作りだした（アンダーソン 一九八七）。そしてわれわれは、流布・普及という単純な物質的な流通のレベルだけではなく、解読という意味の受容のレベルにおいてもまた、テキスト空間の作用を観察しなければならないことを知っている。たとえば印刷革命（アイゼンシュタイン 一九八七）の研究は、開放性を象徴する資料批判やテキストクリティクという行為もまた、複製によるテキストの共有と蓄積

とが可能にしたことを明らかにしている。

第三に空間は、解読力をもつ主体を再生産する。すなわち、そこにテキストが集積され参照する仕組みが作られることによって、内属する主体に解読する力（これを「リテラシー」と考えてもよいだろう）が与えられる。テキストがそこで生産されるだけでなく、読者という主体もまた、テキスト空間の内部で生成している。私の柳田国男論が、民俗や伝承のとらえ方を拡大するとともに、常民を読者と設定しなおしたのはそのためである。

これは根源的には言語という道具そのものの性質に関わる。言語が単に個々の事物を指示する音声記号ではなく、意味のネットワークとしての構造化をもち、資源となることはを配置し蓄える空間としての特徴を有しているからである。人間は言葉という文化を使いこなせばこそ、コミュニケーションと呼ばれる対話作用（相互作用）を生みだし、声を文字に写して蓄積し、世代を超えてテキストを伝えるとともに、人びとが自らの身体を通して考えることや感じることをも現象させている。もし読者のテキスト解読能力をリテラシーと名づけるのであれば、その技術の普及や革新もまた「テキスト空間」の構築のされかたに依存している。つまりテキストを生みだす技術革新だけでなく、テキストの解読力の再生産や維持や向上や変容もまた、テキスト空間のありようとして記述されうる、歴史的な実定性を有するのである。

## 2 出版文化の研究とテキスト空間論

もういちど「空間」から「テキスト」の主題に戻り、近代日本を分析するための準備を整えていこう。空間概念の固有性としてすでに論じた複数性の共存や、共有と排除の実践、さらに主体そのものの生産といった論点を意識しつつ、「出版」というテキスト複製技術とそれが生みだしたテキスト共有の空間の日本近代における特質が論じられる必要があろう。歴史の厚みを見通すためにも、一定の抽象性をもつ図式枠組みが必要となる。

近代の一般性を警戒する

図式の枠組みを論ずるにあたり、基本となるカテゴリーの機能を検討しておく必要がある。機能については、どう有効なのかがあらためて検討されている。しばしば事物の分析において、たとえば生産／流通／消費というカテゴリーが普遍的な視点として無自覚に導入されるけれども、むしろこのカテゴリー自体の近代性が、対象の把握そのものを歪めないかに留意したい。法システム／経済システム／文化システムという、社会理解の枠組みが歴史的に機能分化してきた結果であると同じく、生産／流通／消費の機能分化もまた、近代という社会の特異性に依存した理解枠組みであるからだ。

枠組みとしての「テキスト空間」は、説明のためのモデルというよりも、発見のためのモデルである。対象から独立し切り離しても成立しうる、抽象的で一般的な理論枠組みとまではさしあたりいえない。むしろ対象の生態を観察し、構造的に記述し、理解するための枠組みとして設定され、それゆえに歴史的で社会的な固有性を宿している。もちろん〈個体〉としての書物や文書の振る舞いを記述するだけでは不十分である。そのモノが人間の生活のなかに置かれている環境を含めて、いわば〈種〉としての書物や文書の生態をとらえられねばならない。やや比喩に流れるかもしれないが、なお博物学の時代のように支持体や生態の異なる「新種」のテキストの発見がいくらでもありうると考える。そして対象の生態に対する組織的な観察を開くという点に、図式化の初発の意義がある。そのとき、生産／流通／消費カテゴリーへの安易なもたれかかりは危うい。近代の市場空間の歴史的な特質を前提とした「一般性」や「普遍性」をいささか不用意にもちこみ、テキストの生態に対するまなざしを歪めることになりかねないからである。

日本の出版文化の研究が、これまで流通の局面に偏りすぎていたことも、この危惧と深く関連している。近現代の日本の出版は、なるほどテキスト空間における産業化でもあった。だから「生産」において「出版社」「印刷所」が、「流通」で「卸」や「取次」の営業形態とそこでのルールが問題とされる。そして「書店」と「読者」とが、「消費」の局面で語られるのは、常識の直観に沿った扱いであるかのようにみえる。図1は村上信明が出版物の流通ルートの多様化が感じられ論じられはじめた時代に、その全体像を描こうと試みた図解である。現代における出版物の社会的

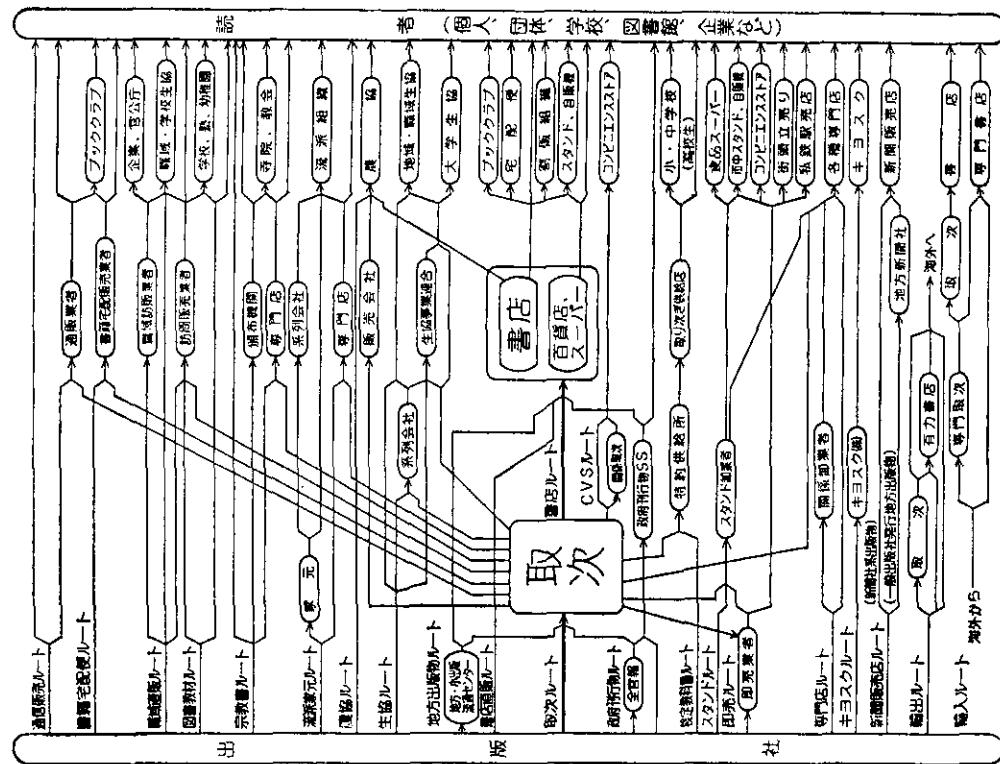


図1 出版物流通チャート。村上信明『出版流通図鑑』新文化通信社、1988年より。

流布のメカニズムとしてみると、たしかに一面ではテキストの媒介機能を分担してきた歴史的組織や社会的主体について、興味深い手がかりを与えてくれている。しかしながら、先駆的な労作だったこの図も含め、その後の出版の研究者が描いた図のいずれもが（たとえば、川井 二〇〇六：一四一、蔡 二〇〇六：一四八など）、生産／流通／消費の関係をほとんど一方向的な流れにしてしまっていることは、なんとも落ち着きが悪く、テキスト空間論として不十分である。その出版分析の基本的な視座が狭い意味での「流通経路」の概念に縛られるために、結果として印刷物というテキストのもつ事物としての性格は、ひどく平板で外面的になってしまう。

たしかに日本の出版産業は、①多数の出版社とさらに多数の小売店をつなぐ「取次」システムを特徴とし、それが②委託配本・返本制度と、③再販価格維持制度によって下支えされてきた。読書の大衆化を支えたこの取次中心の出版システムがいかん歴史的に形成されたのかは後に触れることとして、この二〇年を振り返ってみれば「活字離れ」や「出版不況」が語られ、勃興しつつある新しい書物の流通（たとえばアマゾンを筆頭とする「電子書店」「ネット書店」など）やグーグルに象徴されるインターネット検索の情報提供システムとの対比において、出版というテキストの生産はいつも構造的な「危機」状況にあると論じられてきた。それゆえ、出版というテキストの世界を論じるときに、書物や雑誌の流通機構が視野の中心とならざるをえなかった事情も理解できる。しかしながら、このような空間のなかでの読者は結局のところ、受動的で最終的な受け手以外の何者でもなくなってしまう。読者がテキスト空間自体を生産するという視点は弱く、出版社もまたひどく均質であるばかりか、固有の拠りどころをもたず独立の企図のみに支えられた「投企」の主体であるかのようにみえてしまう。

出版の危機を論ずる人たちが、書物という商品の特異性や印刷されたテキストの事物としての複雑さを忘れていないわけではない。「活字文化」や「教養」といったシンボルがよく持ち出されることから明らかのように、その特異なありよりを強く意識しているように思ひ。しかし、生産と消費を結ぶものを市場流通としてとらえる議論を内側から揺るがし、越境するほどの強度を、この図解のなかの読者や出版社の設定がもちえていないのも事実である。どこかノスタルジックな教養主義の復活願望へとさしあたりの結論が収斂していかざるをえないのは、そのためである。し

かし「教養」を規範化した「教養主義」それ自体が、一九三〇年代の高等教育の大衆化や、日本全集出版の流行による書物の蓄積の拡大など、テキスト空間の内側の歴史的なできごとに依存している。そうした事実を論じようとするとき、図1が達成しえた論点の空間的な配置は、いささか平板で貧弱である。

配置を組み変える

いかなるオルタナティブを用意すればよいか、それ自体がここで取り組もうとするテキスト空間論の課題だろう。新たな図式化を一挙に実現できるほどの準備は、残念ながら私にはまだない。既存の図式を素材に、改良を進めるのも一つの方法であると思う。

たとえば図1の背後にある一方向的な生産／流通／消費の流れを、図2のような循環のイメージにおいて再配置し、さしあたりその基本的な関係性を修正しておくことも役立つだろう。取次を中心とする流通が、出版社に焦点化する生産と、読者が中心に担う消費のありよりを決めている現状を意識しながらも、円環に配置することで新しい関係づ

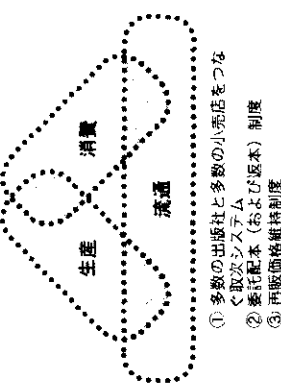


図2

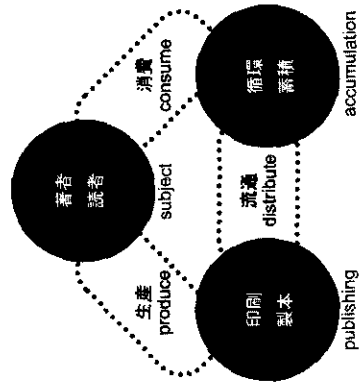


図3

けの余地が生まれるからである。

図3の図式は、もう一歩踏みこんだ改変である。「生産」「流通」「消費」という通行のカテゴリーを配置しつつも、それをあえて図を支える中心とはせず、より実体的で具象的な三つの要素を浮かびあからせるように組み立てなおした試みである。すこしこの三つの要素に込めた意味をたどってみたい。

第一の要素として、「印刷 printing」あ

るいは「製本 bookbinding」という複製技術の生産力を配置した。印刷という、いわばテキスト複製の技術局面が、なぜテキスト空間の分析において重要なのか。すでに触れたように、それが「テキストの生産様式」の重要な技術革新だったからである。基本となるカテゴリーそれ自体の歴史性をきちんと位置づけておかないと、出発点を見失う。「版」もしくは「板」の用字が、刷り出されたものの特質を指示するのは明らかである。やがて新聞の別名となっていく英語の Press と同様に、これらの呼称では印刷行為が生みだした変化に光があたっている。つまり、写本作業によるテキスト生産とは異なる、複製技術 (mechanical reproductive technology) の力の記憶が、公刊事業をめぐる一進の名づけには深く刻みこまれているのである。

なぜ改めて、その深い刻印を強調するのか。それは、活字印刷が革命的で特権的なものであったからだけではない。むしろ逆に、現在も人びとの日常生活に作用しているテキスト生産技術の多様性の認識を誤らないためである。

なるほど、活字印刷テクノロジーの導入と普及による出版の産業化は、日本においてもまた、われわれのテキスト空間を大きく変容させていった。しかしながら、いまなお主体としての人びとは、身近な筆記具を用いて手元で書くことを続けている。その事実もまた、見過ごせない大きな意味をもつ。「書きとめる」「書き写す」実践の存在を、テキスト空間を分析する図式のなかから切り離すことは、ことさらに「出版」を特権化する。ガリ版が果たした役割はすでに忘れられつつあるにせよ (田村・志村 一九八五・志村 一九九五)、コピーやパーソナル・プリンターが生みだしている私家版のようなテキスト生産は、その後継領域として無視できない。この小論でふれることができないが、コンピュータの日常化とケータイの普及によって無視できない領域へと躍りだた、キーボードと画面で書くという経験もまた、テキストの生産様式の観察のなかに繰りこまれなければならない。そのような多様な複製技術の社会的存在形態を視野のうちに収めず、ただ新聞雑誌と書物とが形成した市場化した出版流通の歴史だけをたどるのは不十分である。「テキスト空間論」としては、産業化の効果を相対化しえない偏った展望しか得られないだろう。

図式に配置すべき第二の要素として、総体としてのテキストの社会的存在形態の領域を考察することができる。ある意味では、これまで「流通」とか「市場」ということばで、あるいは「サーキュレーション circulation」として話

られてきた領域と重なる。しかし、そこをあえてすらすらして「循環あるいは蓄積 accumulation」ととらえたのは、テキストをその場限りにおいて消費される単独の生産物ととらえたくなかったからである。フロー (flow) もしくはペロール (percol) に位置づけられるであろう「ベストセラー」や話題の流行商品を見捨てるわけではないが、ストック (stock) あるいはラング (lang) としての複製テキストの蓄積を、二次的な流通も含めて視野に入れるべきではないか。

この要素の配置は、テキストの社会的存在形態を資源としてとらえなおす方向を拓くだろう。テキストがいかに広まり、また参照しうるものとして社会に蓄積していくかという、知識の公共性の形成に光をあてるものだからである。これまでの研究を導いてきた「流通」のカテゴリーは、「公」あるいは「共」の情報知識の蓄積がいかに立ちあがるかを、明確に主題化してきたとはいいがたい。「流通」カテゴリーが産業化論に従属し、そこに内蔵されている時間的な視野があまりにも現在中心主義的であつて、しかも厚みにかけていたからである。たとえば個人の書庫蔵書から、書店の存在形態や店頭の本棚や平台のありよう、さらには図書館という空間のもつ機能や、検索利用の実態にいたるまでの人間の実践を、「流通」という薄いことはは広く豊かに映したすだけの厚みをもたない。あえて「循環・蓄積」というのは、そのような実践を支えているものを空間として把握しなおすためである。古書の流通のような二次的な社会への環流もまた視野に入れる必要があり、さらには官庁や博物館に死蔵されてしまうものから、古紙として再利用されるあるいは断裁されてしまう印刷物の運命まで含めて、その社会的存在形態を押さえておく必要がテキスト空間論としてはあるだろう。そしてわれわれが対象とすべきテキストは、個性的で時に天才的な作者が生みだした一つ一つ切り離された商品ではない。言語文化として社会に蓄積し、記録であるとともに、表現や探究の生産基盤でもあるような形で存在するテキストである。

第三の要素として忘れてたくないのが、いわば「主体 subject」の存在様式である。それは著者や読者にまずは焦点が当てられるものの、編集者や研究者や書籍商のような主体をも含む。

主体の存在様式に注目することで、テキスト空間の認識に何を付け加えようとしているのか。現代を生きるわれわれ

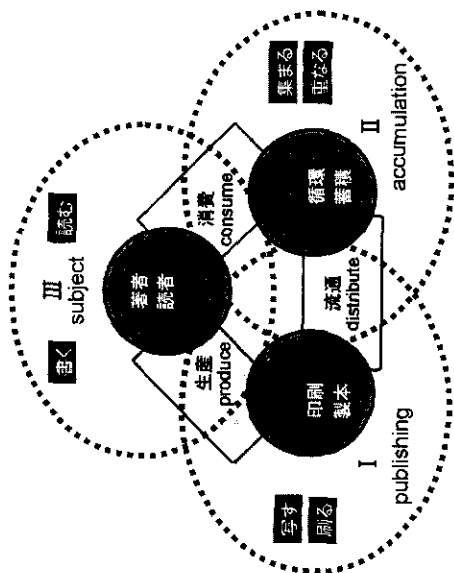


図4

私自身の読書空間論における「常民」読者」モデルや、テキスト学の共同研究プロジェクトが光をあてたテキスト生産や享受の多様なありようが明らかにしたのは、著者というテキストの生産者の基礎となっている読者としての身ぶりや経緯であった。そこから、著者を生産者に、読者を消費者に固定してしまう枠組みの拘束性が浮かびあがる。むしろ最初に読者として現れ始める主体は、手段と機会と位置にさえ恵まれれば著者＝作者に自己形成しうる。声の文化における作者の位置が、文字の文化におけるそれと大きく変わっていたことは、すでに多くの論者が直観的にまた理論的に指摘している。もともと基盤として存在した書かれたものの権力のうえに近代主体思想の枠組みがかぶさっ

れがもつ出版をあぐる常識からすれば、このように著者と読者とを一つに括ることは、いささか違和感を与えるかもしれない。近代におけるテキスト空間の産業化は、著者を生産者として特権化し、「作家」「文学者」「文豪」「思想家」「文筆業」「文化人」等々のカテゴリーを析出させ、どこかでスター化(有名化)していった。と同時に、読者はただテキストを享受し消費するだけの、受動的で無名の存在へと押し込まれていった。その受動性の不自由に対して、マスコミュニケーション研究のなかからは能動的な読者という解釈モデルが提起されたが、読者を流通経路末端の受け手と位置づける枠組みを大きく揺るがしたとまではいえないのは、すでに指摘したとおりである。

著者と読者との明確な棲み分けあるいは分断それ自体が、歴史的現象である。いささか逆説的にみえるかもしれないが、あえて著者と読者の区分を外して図式化したのは、テキスト空間の機能分化として、歴史的にまた社会的に説明されるべき現象とするためである。

たこと、さらに出版市場の成熟がスターに近いブランドを生みだし継続的な作家活動を支える文壇のような世界が成立したことなど、著者の固定化と特権化にはいくつもの要因がテキスト空間上で作用している。それゆえ、あえて著者と読者の区分を外し、主体の存在様式として一般的に提示しておいたほうが、歴史的にも文化的にも視野を広げうる可能性を有するのではないかと考える。

以上の議論をふまえて、考えあわせるべき複数の要素を図式に配してみたのが、図4である。二次元に還元して表現することには制限も多く、まだまだ工夫すべき余地は多いけれども、図3の基本的な発想のうえにテキストと関わる人間の実践を、動きとして重ねる象徴的な動詞を補ってみた。「集まる」「重なる」はあるいは「集める」「重ねる」でもよいのかもしれないが、このテキストの社会的蓄積の領域では、人間の意図や動機を超えるものもまた示しておきたい。大きくテキストを主語とするような動詞表現にした。

すでにくりかえし指摘しているように、これらはいずれも自立し安定した分類カテゴリーではなく、テキスト空間のダイナミクスを分析する用具として仮に設けた便利でしかない。ここでは日本近代のテキスト空間の特質に対する暫定的な見通しを可能にする仕掛けとして用意しておきたい。であればこそ、この図式上に配置されるカテゴリーそれ自体の生成と変容とを分析的に語る、歴史社会学の文体が要請される。

### 3 近代日本のテキスト空間を論ずるために

図4に配置したような問題関心のもとで、もうすこし踏みこんで近代日本のテキスト空間の特質をpushしておこう。いずれもまだ試掘の段階だが、探っていくべき多くの課題があるように思う。

#### 活版印刷の銀河系

まず第一に、複製技術とテキスト空間との関係である。その時代に支配的なものとなった複製技術が、テキスト空

間の基礎を規定している。テキスト空間の近代は、やはり活字印刷を一つの核に生成したシステムとして描きだされるだろう。これに対して「出版」すなわちテキストの商品化が本格化しつつあった近世は、手書き写本の基礎のうえに、整版(木版)の生産力を接合することで生成したシステムと特徴づけられる。時代をさらに遡るにつれ、手書きや声の要素がテキスト空間の形態に深い影響を及ぼすと思われるが、ここではやや領域が広がりすぎるので踏みこまない。テキスト空間の近代以前から近代への変容は、それを年表のように語ることも、いわゆる近代化論のような線形の順序に図式化することも、あまり適切ではない。その時々のテキスト空間それ自体の形態の特質の分析を必要とするからである。

木版印刷を主要な技術とするテキスト空間の構造化は、テキストの生産や受容に関わる主体の存在形態にも、複製印刷技術や製品化のありようにも、また社会的な循環や蓄積の形態にも関わってくる。近世の出版は近代に比してたしかに機能未分化で、都市や知識人階級を中心とするなど局地的であった。独立の本屋だけでなく、例えば版木屋や表紙屋や縫師屋(表具屋)が、あるいは貸本屋が書物生産に積極的に関わって出版をリードする例もあった(長友二〇〇三)。しばしば総入りで美しい印刷の表紙を付けた俳書が私家版として作られたが、書物の社会的な循環と蓄積とを考えると、著者でもあり読者でもあった俳句趣味の人びとの、時に全国にまで広がったネットワークを無視するわけにはいかないだろう。最近では、草双紙や錦絵の特質を、近代の雑誌出版が切りひらいたと同じような継続出版の力にみる議論もあって(中野二〇〇五)、未分化というだけではすまされない固有の構造を想定させるものがある。近世の書物の流通は、よく知られているように「物之本」(漢字書籍)と「地本」(草紙錦絵等)の区別という二層構造のもとで発達した。地本問屋が扱った錦絵などのテキストは、その「視覚性」とシリーズとしての刊行の「継続性」等の特質によって、複製テキストの市場を拡大し、流通システムを形づくっていく推進力となった。細見や武鑑や往来物や重宝記など、知識の実用性をどこかで匂わせたテキストも、このような力を共有していたかもしれない。

そう考えると複製技術の生産力とは別に、「継続性」は近代テキスト空間の分析の重要な論点となりうる。これまであまり強調して論じられたことがないが、第二の論点として挙げておく。出版事業と印刷物の「継続性」がいかな

る制度性をもってテキスト空間に現れ、市場を構造化していったか。

近代の初期において、テキスト空間に新しい要素を生み出したのは日刊化した「新聞」であり、学校という制度と結びついた「教科書」であった。「法令・布達」「官報」も、たんに指導広報のための印刷物というだけではなく、新しい情報伝達のしくみでもあったわけで、広い意味でこの二つの要素の混合ととらえることができるかもしれない。当初、雑誌と未分化な形で出発した「新聞」は、やがて一枚刷もしくはその集合形態として綴しの工程を必要としない今日おなじみの日刊の「新聞紙」の形態へと専門分化していく。その流通と重なりあいながら、「雑誌」という新しいテキストの形態が、近世にはなかった全国的な「取次」という流通のシステムを立ちあげていく。

近世における印刷物の商品化すなわち出版流通システムの継承と拡大および機能分化のうえに、一八九〇年代になると博文館を中心とした、いわゆる「雑誌の時代」が開いた。「雑誌」を主軸としたテキスト空間の「市場」的な特質の拡大は、一九三〇年代になると「円本」といういわば雑誌的で寄せ集め的であると同時に、教養の全体性・体系性を志向する書物生産のブームにおいて、単行本形態の冊子にも及んでいく。新聞/雑誌/円本が切り開いたテキスト空間の市場性は、「取次」というシステムが力を持ち、支配的なものとなっていく出版の基本構造を形作った。継続性をもつと同時に寄せ集めの内容をもつ雑誌が切り開いて制度化した流通システムのなかで、学問を支える研究書を含めた単行本としての書物が配分される。このプロセスにおいて、「郵便」と「鉄道」と「学校」という、ネットワーク的な技術や組織が果たした役割は大きいと思うが、ここでは深入りできない。しかし図1の図式のような認識に切り縮められて固定化される前に、探って導入すべき論点がありそうに思う。

### 読者の生産とテキストの社会性

第三に、新たな制度が読者としての人びとに新しい感覚様式を与えた事実もまた、丹念に掘り起こされなければならない。一例として、上で触れた「新聞」を取りあげておこう。

新聞が単なる「継続性」やら「速報性」だけでなく、「定期性」という特質を内蔵していた点は、じつはテキスト



空間にも新しい時間意識を生むこととなった。すでに別なところで「新聞錦絵」の印刷物としての特徴を取りあげて論じたことがあるが（佐藤 一九九、二〇〇一）、新聞の周期性がその制度的な特質ゆえに「新しさ」の感覚を、購読者を通じて社会にインストールする媒体となったという論点は、単なるエピソードではなく「新聞」概念の基本に関わる問題構成である。「錦絵新聞」という名づけの正当性を主張する論者の多くが読み落としただけでも、この感覚変容の事実を取りあげずに、新聞というテキストが近代の社会に及ぼした力を正確に理解することはできない。新聞史の研究者は時に、すでに制度化された近代新聞システムの特徴に依拠したまま基本カテゴリを不用意に使い回し、論理を転倒させ遠近法を倒錯させてしまう。

すなわち、新聞を支えているとされる「速報性」や「定期性」や「事実性」といった特質を、人びとが自然に、何の参照点も枠組みもなしに判定しえたかのような反歴史的な錯覚を紛れこませてしまうのである。読者と呼ばれる主体の主観的な意味づけ（たとえば読者が初めて聞き知った出来事であり、その情報を新しいと思ったのであれば「新聞」ととらえることができる等）に過度に依拠する「新聞」や「ニュース」の定義は、不安定である以上に事物としての本質をメディア論としてとらえそこなっている。テキスト空間論の立場からは、定期刊行という制度による「新しさ」の感覚の読者および社会へのインストールが、とりわけ重要な意味をもつ。新聞の定期刊行の継続のうえに「速報性」という時間軸上の基準が、初めて社会的なものとして生まれたのであって、情報の新しさとその判定のうえに成り立つ「ニュース」の感覚が社会にアブリオリに存在したわけではないからである。

第四に、単に表層的な変動のレベルでの商品流通に焦点をあてた「出版流通」ではなく、資源としてのテキストまでを視野に入れた社会における「循環」と「蓄積」とが探られなければならない。この論点も、ある意味ではこれまでの出版研究の一部にあつて、善かれ悪しかれ業界の専門知識を供給してきた、いわば業界知中心主義的な姿勢の再検討を迫るものである。この一〇年足らずの間に業界そのものが大きく変動したので数値それ自体は単なる目安ではないが、二〇〇三年の段階で中小を含むはば四〇〇〇という多数の出版社と全国各地約二万のさらに多数の書店を共在させる（長谷川 二〇〇三：二四九）、委託配本と再販制度を軸とした「取次」の存在は、たしかに日本の出版業

界の特質の一つであつた。その特質は、例えば巨大な出版量を処理する「効率性」として、あるいは新刊点数を異常なほどに増大させる仕組みとして論じられてきた。もちろんそこに潜在する出版社団体間の「南北問題」（湯浅 二〇〇七：八九―九六）も重要だが、それだけでなくあらためて「循環・蓄積」の観点から、テキストの社会的存在形態を観察し、評価のコンテクストを設定しなおす必要も生まれてこよう。

もちろん、断片としてであれば、もうすでに多くが語られているかもしれない。

小売店側の仕入れ買い取り制ではなく、売れなかった商品としてのテキストの返品を可能にする委託販売制は、日本全国の書店の店頭の本棚を新刊中心の陳列空間としてテキストを社会に流布させ循環させる仕組みであつたし、その陳列空間は立ち読みという読書行為を許容してごく普通の人びとの日常に読書する時間を生みだしてもいた。その意味では小売店としての書店は図書館という空間とつながり、「私」空間としての書斎とも隣接する「公」「共」の場であつた。最近の二〇年の間に、旧市街の中心にあつた昔ながらの本屋の数が減っていく一方で、新たに outlets する書店の多くは郊外型で面積ばかりが広くなりコンビニエンスストア化していったといわれる。そのそれぞれの空間の違いは、しばしば直感的に指摘されるけれども、総体として明確に分析されているとはいえない。

また古くは店頭の本に挿みこまれた注文カード（スリップ）から、現在検討中の電子タグにいたるまで、テキストの流通を管理する技術も論じるべき多くの課題を含んでいる。しばしば国家統制と直結した議論がなされ、戦後の取次各社の原型ともなつた「日配」すなわち日本出版配給株式会社総動員体制批判と結びつけられる傾向があるが、視点や論じ方がいささか単調である。一九七〇年代の書籍コード、一九八〇年代のISBNを取りこんだ日本図書コード、一九九〇年代のバーコードなど、その導入の結果や意図せざるものまで含めた効果についても、テキスト空間にどう作用するかは社会学的想像力を駆使すべき課題である。一般に、こうした流通情報のいわば「上からの透明化」の技術は、流通の基幹システムを支配している取次の力を増し、市場の動向やマーケティングを重視する一部の出版社などに利用されると警戒されるけれども、中小零細の出版社や個性的な書店や普通の本好きの読者の側からのすなわちいわば「下からの透明化」のために役立てられないものなのかは、あらためて論じられてよい。

稿をいったん閉じるが、もういちど出発点を確認しておこう。テキスト空間は、テキストの社会的存在形態の総体であり、情報を記録し意味を表象するテキストと、それを生みだし読み解し考え集め伝える人間とが、集合的に織りなす。しかもそれは事実としてのテキストの生態を観察し、発見するためのモデルとして、いままさに構築の途上にある。本論考は、その始まりの一步である。

#### 参考文献

- アイゼンシュタイン、エリザベス 一九八七 『印刷革命』別宮貞徳監訳、みすず書房。
- アンダーソン、ベネディクト 一九八七 『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』白石隆・白石さや訳、リプロボート。増補版、NIT出版、一九九七年。改訂増補版、書齋工房草山、二〇〇七年。
- 川井良介(編) 二〇〇六 『出版メディア入門』日本評論社。
- 梶尾憲 二〇〇六 『出版産業の変遷と書籍出版流通——日本の書籍出版産業の構造的特質』出版メディアバル。
- 佐藤健二 一九八七 『読書空間の近代——方法としての柳田国男』筑摩書房。
- 一九九九 『新聞錦絵と錦絵新聞』「ニュースという物語」、木下直之・吉原俊哉編『ニュースの誕生』東京大学総合研究博物館。
- 二〇〇一 a 『歴史社会学の作法——戦後社会科学批判』岩波書店。
- 二〇〇一 b 『新聞錦絵とは何か』木下直之・北原糸子編『森本明治ニュース事始め——人は何を知りたがるのか』中日新聞社。
- 志村章子 一九九五 『ガリ版文化を歩く——購写版の百年』新宿書房。
- 田村紀雄、志村章子(編) 一九八五 『ガリ版文化史——手づくりメディアの物語』新宿書房。
- 長友千代治 二〇〇二 『江戸時代の図書流通』思文閣出版。

中野三敏(監修) 二〇〇五 『江戸の出版』ベリかん社。

長谷川一 二〇〇三 『出版と知のメディア論——エディタースタッフの歴史と再生』みすず書房。

マクルーハン、マーシャル 一九六七 『人間拡張の原理』後藤和彦・高嶺進訳、竹内書店。

村上信明 一九八八 『出版流通図鑑——50万アイテムの販売システム』新文化通信社。

湯浅俊彦 二〇〇七 『日本の出版流通における書誌情報・物流情報のデジタル化とその歴史的意義』ポット出版。

## 執筆者略歴

### 齋藤 晃 (さいとう あきら)

1963年生まれ。国立民族学博物館先端人類科学研究所准教授。文化人類学、ラテンアメリカ研究。征服以降の南米先住民の社会と文化の変容過程の研究に従事する。『南米キリスト教美術とコロンブス・ブズム』(共著、名古屋大学出版会、2007年)、『歴史、テクニカル、ブルジョア——17・18世紀のイェズイット宣教師の記録を読む』(森明子編『歴史叙述の現在——歴史学と人類学の対話』人文書院、2002年)など。

### 飯島 明子 (いじま あきこ)

1951年生まれ。天理大学国際文化学部教授。歴史学、東南アジア史。東南アジア大陸北部地域のタイ (Tai) 人を中心とする歴史研究に従事する。"The 'International Court' System in the Colonial History of Siam" (*Taiwan Journal of Southeast Asian Studies* 5 (1), 2008)、"ソープローたちをめぐるオーラル・ヒストリー——セーンクワイー小史へ向けた覚書き" (『東南アジア研究』45巻3号、2007年) など。

### 大黒 俊二 (おおぐろ しゅんじ)

1953年生まれ。大阪市立大学大学院文学研究科教授。イタリヤ中世史、西欧中世説教史、西欧中世経済思想史。『嘘と貪欲——西欧中世の商業・商人観』(名古屋大学出版会、2006年)、『逆なで、ほこちび、テクニカルとしての社会』(森明子編『歴史叙述の現在——歴史学と人類学の対話』人文書院、2002年) など。

### 榎永 真佐夫 (かしのが まさお)

1971年生まれ。国立民族学博物館民族社会学研究所准教授。博士(学術)。東南アジア民族学。ベトナムのタイ語系民族の文化継承に関する研究に従事。『東南アジア年代記の世界——黒タイの『クアム・トー・ムオン』』(風響社、2007年)、『黒タイ首領一族の系譜文書』(共著、国立民族学博物館、2007年) など。

### 佐藤 健二 (さとう けんじ)

1957年生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科教授。社会学。文化人類学。研究専攻の立ち上げに協力。社会・文化研究の方法の発展

## テキストと人文学 知の土台を解剖する

2009年1月10日 初版第1刷印刷

2009年1月20日 初版第1刷発行

編者 齋藤 晃

発行者 渡辺博史

発行所 人文書院

〒612-8447 京都市伏見区竹田西内堀町9

電話 075-603-1344 振替 01000-8-1103

印刷所 創栄図書印刷株式会社

製本所 坂井製本所

著者・社団法人は小社送料負担にてお取寄いたします

© 2009 Jimbun Shoin Printed in Japan

ISBN 978-4-409-04095-9 C3000

※(日本複製権センター委託出版物)  
本書の全部または一部を無断で複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き禁止されています。本書からの複製を希望される場合は、日本複製権センター(03-3401-2882)まで連絡ください。